

2021年度第1回プロジェクト評価委員会 議事抄録

日時：2021年5月12日（水）13:00～14:16

場所：Zoom（Web会議）

出席者（敬称略）：

委員会委員 麻生、大西、小杉、齋藤、清水、戸谷、満田、山崎、米倉、渡邊

作業部会構成員 渡部、大内、小林、立松、深川

オブザーバ：倉崎（台長特別補佐）、堀（研究評価支援室）

欠席者：川端（委員会）、井口、宮崎（作業部会）

【議 題】

1. 前回議事抄録の確認
2. プロジェクト評価の考え方と進め方について

【配付資料】

- 資料1 2020年度第4回プロジェクト評価委員会 議事抄録
- 資料2 プロジェクト評価の考え方，プロジェクト評価委員会の役割とプロジェクト評価の進め方（案）
- 資料3 プロジェクト評価におけるステークホルダ関係図（案）

【議 事】

1. 前回議事抄録の確認
齋藤委員長より、前回会合の議事抄録（資料1）について説明があった。
2. プロジェクト評価の考え方と進め方について
齋藤委員長より、前回議論および国立天文台コミュニティ間意思疎通推進委員会からの提言¹を踏まえて改訂した、プロジェクト評価の考え方と進め方（資料2）、資料1の照会時に送付した、前回議論に基づく各ステークホルダの関係とPDCAサイクルの概念図（資料3）について説明があった。
委員間で意見交換を行い、プロジェクト評価委員会（以下、「本委員会」と略記）としては、当面、以下の方針で進めることが承認された。

（1） 現案に沿って、プロジェクト評価を開始する。

（現案）

- ・本委員会は個々のプロジェクトの評価に関する重要事項を決定し、それに基づき、外部評価委員会が評価を行い「評価報告書」を作成する。
- ・本委員会は、「評価報告書」に本委員会の提言をまとめた「意見書」を添えて台

¹ https://www2.nao.ac.jp/~open-info/com-promotion-com/docs/final-report_20210310.pdf

長へ提出する。

- ・「国立天文台全体と国立天文台が実施するプロジェクト全体のサイエンス成果の最大化」（以下、「天文台全体の成果の最大化」と略記）は、運営会議あるいはその下に設置される委員会等において議論する。本委員会が提出する評価報告書と意見書は、この議論において活用される。

(2) (1) と並行して、「天文台全体の成果の最大化」のプロセスについて、台内および運営会議で検討する。検討が進んだ段階で本委員会を開催し、意見書の位置づけを再定義し、必要に応じて本委員会のあり方、役割等を見直す。

議論で出た主な意見（概要）：

○プロジェクト評価の考え方と進め方（資料2）

- ・「意見書」と「共通の評価の観点」の加筆により、個別プロジェクトの評価に本委員会の特性を活かしてコミュニティの視点を入れることが可能になる。また、「天文台全体の成果の最大化」の議論において、個々のプロジェクト評価の結果をより活用してもらうことが可能になる。
- ・意見書の内容は特に制限せず、本委員会の意見を自由に盛り込むことができると考えてはどうか。
- ・本委員会の位置づけは、「天文台全体の成果の最大化」のプロセスにどこまでコミットするかにおいて、不明瞭である。運営会議の下に今後設置されるであろう委員会の委員構成次第で、意見書の意義・役割が決まる。「天文台全体の成果の最大化」の議論の中で、評価報告書と意見書がどのように扱われるかを確認して、資料2（前文、3. 本委員会の役割、等）を見直す必要がある。
- ・「天文台全体の成果の最大化」の議論にコミュニティの意見を反映させるには、本委員会が積極的にコミットすればよいのではないか。
- ・（「天文台全体の成果の最大化」の観点から）運営会議もプロジェクトの評価を行う場合、プロジェクト側への負担が危惧される。運営会議にはその点を配慮した評価方法を考えてもらい、それに応じて、評価報告書と意見書の位置づけを修正すればよいのではないか。
- ・外部評価に関する事項（ア）～（ク）は、並列でなく、誰がどう決めるかを明確にして整理してはどうか。（オ）評価の観点、評価基準、を決めて外部評価委員会とプロジェクトに渡すことが、本委員会の大きなタスクではないか。
- ・資料2の5. 本委員会の役割と天文台規則の関係について、プロジェクト評価委員会規則の第2条2第二号（プロジェクトの設置改廃に関する事項）は今後も残した方が、意見書を加筆したこととの整合性が取れるのではないか。
- ・意見書の提出により、本委員会がプロジェクトの設置改廃にexplicitに踏み込むのは難しいだろう。設置改廃は、最終的には天文台が判断する。
- ・天文台が上記第二号を含む規則をなぜ修正しないのかは疑問。

- ・過去に本委員会（の前身である研究計画委員会）において、個別プロジェクトの改廃を議論して運営会議に上げた例があった。

○ステークホルダ関係図（資料3）

（会議前に委員から届いた意見）

- ・天文台全体のPDCAと各プロジェクトのPDCAが独立しており、二重ループを表現できていない。各サイクルのActionの主体も明記されていない。

（議論で出た主な意見）

- ・図中、両PDCAをつなぐパスを加えることで、上記指摘をある程度解消できる。
- ・天文台全体のPDCAは今後議論が必要だが、以下が考えられる：台長が本委員会からの答申（個別プロジェクトのCheck）を受け、重要事項を運営会議で議論することで天文台全体のCheckが入り、運営会議から台長へ提言が出される（Action）。このうちプロジェクトに対するActionは、台長から各プロジェクトへ伝えられ、個別プロジェクトのActionとなる。

3. その他

本委員会の進め方について昨年度より4回にわたる議論を行い、プロジェクト評価の実施に向けて前進できる状況になったことについて、齋藤委員長より全委員へ御礼があった。また、今後はメールベースで、

- ・本日の意見を踏まえた、資料2、資料3の修正
- ・今年度実施するプロジェクト評価の詳細（プロジェクト名、実施時期等）に関する連絡、調整

を進めたい旨、周知があった。

以上